

5 代目 編集長就任にあたって

いよいよ「時代」 がやってきた

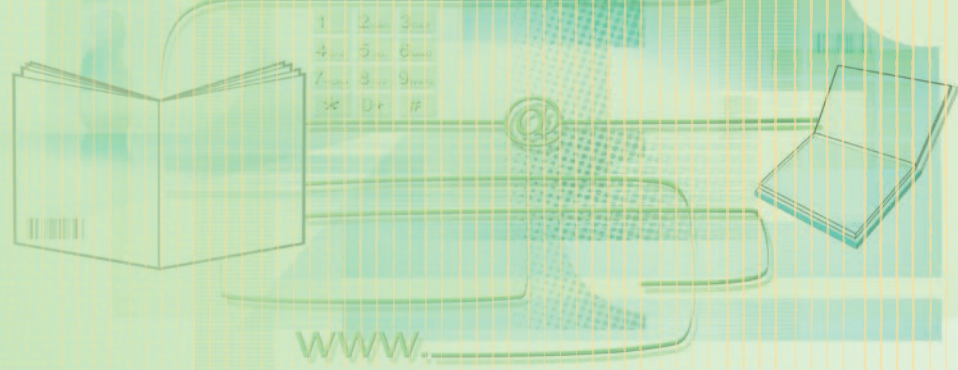


塚本 昌彦（神戸大学大学院）

このたび5代目の会誌編集長に就任するにあたり、謹んでご挨拶申し上げます。これまでの歴代編集長の錚々たる顔ぶれの後を若輩である私が引き継ぐことになり、たいへん光栄であると同時に身の引き締まる思いです。前編集長の中島秀之先生よりお話をいただいた際には、あまりの大役に躊躇もありました。しかし、無謀にもやらせていただこうと決断したのは、元来の前のめりな行動パターンとともに、私自身の中に会誌に対するやり残した気持ちがざわついていたからかもしれません。

もとはといえば2009年から2011年まで会誌担当理事となったことが、会誌編集に直接携わったきっかけでした。理事退任後も2年間編集委員として編集に携わったので合計4年間携わらせていただきました。当時は自分なりに改革を試みたつもりでした。季節性を持たせてはどうか、トレンドな話題を取り扱ってはどうか、巻頭コラムを始めてみよう、シニアコラムも始めてみよう、チュートリアルを始めてみよう、付録をつけてみよう、云々。無論、これらの多くは中島前編集長の下で行ったものであり、中島先生のご指導によって達成されたところが大きいのですが、それでも自分なりに達成感がありました。

委員を退任し、再び一般読者として会誌の到着を楽しみにするようになってみると、その頑張っていたことのひとつひとつが自分のやりたいことを達成しただけではなかったかという疑念にまみれました。会員減、予算減、カラーページ減、と連鎖するマイナスになんら尽力できなかったのではないかと、読み物としての楽しさが徐々にもぎ取られてゆくことに歯止めをかけるのは本当に不可能だったのだろうか、まだまだできることはあったのではないかと。変わりゆく時代に必要な技術トレンドを盛り込むことや商品やサービスのサーベイも必要なんじゃないだろうか、コアとなる技術は面白く読みやすく盛り込んでいくことで魅力が増すのではないかと、応用分野も幅広くカバーしなければ…、違う分野の人も



楽しく読めて、読むことで何か発見があるような記事を盛り込めないだろうか、逆に、違う分野のことも盛り込めたらいいのではないか。会員サービスとして、会員間のつながりやコミュニティ内のコミュニケーションの活性化も会誌が媒介すれば、学会のアクティビティのPRと活性化もすすめて…。そういった思いを時折巡らせていました。

さて、皆から異様な風貌として定評のある私のウェアラブルスタイルも2001年からはじめ、すでに13年の月日が経ちました。当初は「すぐに流行る」と大型のHMD（Head Mounted Display）を頭につけ、腰にノートパソコンをぶら下げていました。学会の皆さんにも評判は良かったのですが、メディアには特にうけて「ウェアラブルの伝道師」というキャッチフレーズまでつきました。しかし「近いうちにやってくる」ことは実現せず、毎年「いよいよ今年こそ」と意図せずオオカミ少年のごとく同じ予言を発し続けてきました。折しも、ここ1, 2年、欧米を中心に「本当に」ウェアラブルの兆しが現れています。眼鏡型とウォッチ型の発売がまずは先行し、それ以外のウェアラブルも増えてきています。うまくすれば私が編集長の間に街角で皆が利用しはじめるのではないかと考えています。いよいよ「時代」がやってきたという気がします。日本企業は今こそウェアラブルに取り組んでほしいし、そのなかで私も頑張ってリーダーシップをとっていきたいと思います。

本誌においては、今後何をやっていくかは改めて編集委員の皆様としっかりと考えていこうと思っています。前編集長からバトンタッチされた現時点で、今年の年末ぐらいまでは企画が決まっており、おかげさまでゆっくり取り組みそうです。びっくりするようなチャレンジで世間をあっと驚かせたい気持ちもありますが、まずは今この巻頭言を読んでくださっている会員の皆様に、いよいよ塚本の「時代」がやってきたと言っただけのよう編集委員会一同一丸となって楽しく会誌づくりをすすめていこうと思います。また皆様においては今後の本誌の発展のために、忌憚のないご意見を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

(2014年3月11日)

塚本昌彦（正会員） tuka@kobe-u.ac.jp

1964年大阪生まれ。京大工数理卒、京大院応シス修士了、工学博士。2004年より神戸大教授、現在に至る。2001年3月よりHMDの装着生活を始め、ウェアラブルの研究開発と啓発、普及推進活動を進めている。